

原 著

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究17
P.1-10(2016)中学校における不良行為少年を保健室に受け入れる養護教諭の思いと
受け入れの判断に影響する因子Factors Influencing *yogo* Teachers' Acceptance of
Middle-School Juvenile Delinquent Students奥野 愛海¹⁾
OKUNO Manami櫻井 しのぶ²⁾
SAKURAI Shinobu中西 唯公³⁾
NAKANISHI Yuko

要 旨

養護教諭15名を対象に不良行為少年の受け入れの判断に対する思いを調査し、養護教諭が少年の受け入れを判断する際に影響する因子を検討した。データは半構成的面接によって収集し、Grounded Theory Approach (Strauss & Cobin) を用いて分析を行った。分析の結果、養護教諭が少年の受け入れを判断する際に影響する因子は、【少年を受け入れたい思い】【他の生徒が利用しにくくなる状況】【養護教諭のみの対応による限界】【力量への自信のなさ】【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】【サポートしてくれる人をつくる努力】【生徒への理解を深める】という7つのカテゴリで構成されていることが分かった。その中でも【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】は受け入れの判断に最も大きな影響を及ぼす因子であり、養護教諭は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得るために【サポートしてくれる人をつくる努力】をする必要があることが示唆された。

キーワード：養護教諭、不良行為少年、受け入れ、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Key words : *yogo* teacher, juvenile delinquent students, acceptance, Grounded Theory Approach

I. 緒言

学校現場において、反社会的行動を中心とした生徒の不良行為は教師を悩ませ続ける課題となっている^{1) 2)}。特に中学生は、家庭環境や仲間・教師との関係、本人の性格特性・自己概念など背景に抱える問題³⁾に思春期の葛藤が加わり、問題行動が顕在化しやすい時期にあり^{4) 5)}、不良行為が課題になりやすい時期である。

不良行為少年（以下、少年）らは、不良行為の一環として授業や部活動を放棄することもあり、中学校の保健室には学校内で行き場所を失った少年が集まってくる傾向がある。中学校は義務教育の最終段階であり、不良行為が常態化し、社会的逸脱行為や犯罪への入り口になる分岐点でもあることを鑑みると、ここでの養護教諭の関わりは不良行為少年の今後に大きな影響を及ぼすと考えられる。特に、助けを求めて訪れた保健室で養護教諭に拒まれることは、少年にとって学校内で唯一の逃げ場を失うことであり、不良行為を非行に発展させる危険性も高い。

だが、「他の生徒が入りにくい」「養護教諭が生徒を保健室に取り込んでいる」など、少年らが保健室を訪れる様子が学校内で非難的となる事例もたびたび報

1) 三重県松阪市立松尾小学校

Matsuo Elementary School

2) 順天堂大学医療看護学部

Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

3) 順天堂大学スポーツ健康科学部

Faculty of Health and Sports Science, Juntendo University

(Oct. 5, 2015 原稿受付) (Jan. 22, 2016 原稿受領)

告され⁶⁾⁷⁾、他の教師から厳しい捉え方をされる状況と来室して来る少年と向き合いたい気持ちの狭間で、少年の受け入れに悩む養護教諭も少なくない。

さらに、少年の受け入れに悩む養護教諭に焦点を当てた研究はこれまでのところ報告されておらず、依然としてその具体的な解決策を示した論文がないことが、養護教諭の悩みに拍車をかけていることが予測される。

そこで本研究では、少年の受け入れに悩む養護教諭に具体的な解決策を示すための第一歩として、質的研究を用いて養護教諭の実際の経験を調査し、養護教諭が少年の受け入れを判断する際に影響する因子や、養護教諭が少年を受け入れるために行っている具体的な方策を明らかにすることを目指す。

II. 目的

- ・養護教諭が少年の受け入れを判断する際に影響する因子を明らかにする
- ・養護教諭が少年を受け入れるために行っている具体的な方策を明らかにする

III. 用語の定義

不良行為少年：非行少年には該当しないが、飲酒、喫煙、深夜はいかい、その他の自己又は他人の徳性を害する行為をしている少年（少年警察活動規則第2条第6号）

IV. 研究方法

1. 研究対象

中学校に勤務している養護教諭。養護教諭が集まる研修会に研究者が参加し、本研究について説明後、同意が得られた養護教諭に調査への協力を依頼した。

2. データ収集方法：インタビューガイドに沿った半構成的面接

インタビュー内容は主に①養護教諭としての経験年数・経験学校数、②保健室で不良行為少年を受け入れたエピソード、③保健室で不良行為少年を受け入れなかったエピソードであった。実施場所については、研究対象者と筆者が1対1になれる場所であることを条件に、研究対象者の指定する場所に向いてインタビューを実施した。

なお、面接時間は研究対象者1人あたり30分から1時間30分程度であり、面接内容は調査対象者の承諾を

得てICレコーダーに録音し、適宜ノートへの記録も行った。

3. データ分析方法

Grounded Theory Approach (Strauss & Corbin, Kathy Charmaz, 戈木) に準じ、以下の手順で分析を行った。

まず、逐語録を作成し、データの全体把握を行った。その後、データの切片化を行い、ラベル名をつけた。その際に、切片ごとにプロパティとディメンジョンを抽出した。

次に、上位の概念であるカテゴリーを作り、各カテゴリーに名前をつけた。

その後、カテゴリーの中でもより多くの現象に関わるものを上位カテゴリー、他をサブカテゴリーと位置付けて、1つの上位カテゴリーと複数のサブカテゴリーをプロパティとディメンジョンによって関係付けた。

最後に、カテゴリー間の関連性、帰結が論理的に結合されるようにカテゴリーを整理し、ストーリーラインを明らかにした。

なお、養護教諭の経験を持つ学校保健の研究者複数名とGrounded Theory分析を専門とする大学教授によりスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

研究協力依頼を行う際は、研究協力依頼文を用いて、研究目的、研究意義、研究方法、倫理的配慮、研究中・研究後の対応について口頭と文章で説明し、同意が得られた者のみを研究対象とした。その際に、研究への不同意によって不利益を受けることはないことを保証し、研究協力への同意は、対象者の自由意思で行うものであり、研究のどの段階でも撤回することが出来ることを説明した。

また、個人情報漏洩することのないよう、本研究で得られた音声データは、研究者本人が逐語録に起こし、個人情報に関わるデータをすべてコード化し、匿名性の保持に留意した。

なお、本研究は2012年3月15日の順天堂大学大学院医療看護学研究科研究等倫理委員会で承認を得ている。(承認番号：順看倫第23-36号)

表1 調査協力者の背景

ステップ	年齢	性別	養護教諭としての経験年数	勤務地の都道府県	ステップの基準
1	54歳	女	34年	A	経験年数の長い養護教諭
	56歳	女	36年	A	
	45歳	女	26年	A	
	52歳	女	32年	A	
	38歳	女	10年	A	
	54歳	女	34年	A	
	58歳	女	38年	A	
2	27歳	女	4年	A	経験年数の短い養護教諭
	25歳	女	2年	B	
	23歳	女	1年	B	
3	25歳	女	2年	C	A地域以外の養護教諭
	25歳	女	2年	C	
	25歳	女	2年	D	
	31歳	女	7年	E	

V. 研究結果

1. 調査協力者

中学校に勤務している養護教諭15名に面接を実施した。

本研究への同意が得られた養護教諭8名に面接を行った。第1段階の面接では、経験年数が30年以上の養護教諭が多く、少年を保健室で受け入れたエピソードに偏っていたため、第2段階として経験年数5年未満の若い養護教諭3名に面接を実施した。さらに、分析の途中経過で、調査の基盤となっていたA地域は他の教職員が養護教諭の職務について学ぶ機会が多く、保健室への理解も進んでいる学校が多いことが分かったため、第3段階としてこれまでの調査の基盤となっていたA地域以外の4都県の養護教諭4名に面接を実施した。

調査協力者の一覧を表1に示した。

2. 分析結果

分析の結果、養護教諭が少年の受け入れを判断する際に影響する因子は、【少年を受け入れたい思い】【他の生徒が利用しにくくなる状況】【養護教諭のみの対応による限界】【力量への自信のなさ】【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】【サポートしてくれる人をつくる努力】【生徒への理解を深める】という7つの上位カテゴリーで構成されていることが分かった。

養護教諭は保健室で【少年を受け入れたい思い】を持っていたが、【他の生徒が利用しにくくなる状況】

や【養護教諭のみの対応による限界】、養護教諭自身の【力量への自信のなさ】を感じ、保健室で少年を受け入れることを躊躇していた。そこに【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】が加わると、保健室を少年らのたまり場にしてしまう不安や力量への自信のなさが緩和され、保健室で少年を受け入れることが出来ていた。また、養護教諭は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得るために【サポートしてくれる人をつくる努力】をしたり、他の生徒が入りにくい状況を改善するために【生徒への理解を深める】努力をすることで、保健室で少年を受け入れることが出来る要因を強化していた。

カテゴリー同士の関連を図1で示し、以下、それぞれのカテゴリーについて説明する。

上位カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは[], コードは「 」、対象者の語りは「 」で示した。

1) 【少年を受け入れたい思い】

養護教諭は少年について「あの子をやっぱりいい子やと思っとるから」と語り、[少年は本当はいい子]と捉え、少年に対して『体を大切にしたい』『正しいストレス解消法を身につけて欲しい』『夢を持って欲しい』などの「少年が変化してくれることへの希望」を持っていた。

さらに、「4年前もよく似た子たちだったんで(中略)たまに町で声掛けると“楽しい!高校行ってよかったわ”とか言ってくれたんで」という様に、養護教諭が少年に関わることで少年がいい方向に進んでくれたという「過去の成功体験」があると、「裏切らない

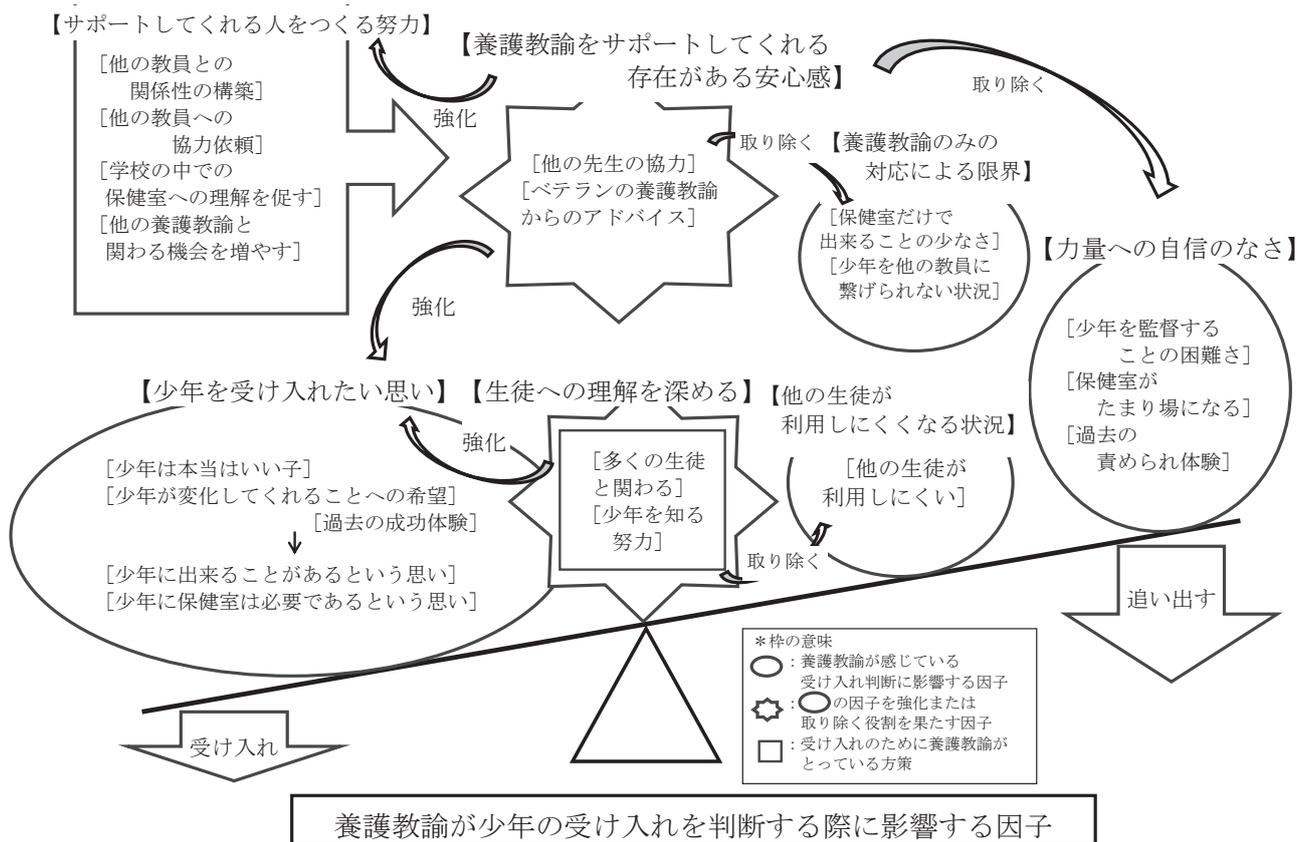


図1 カテゴリーの構造

大人がいるってことを知ってもらおうことを目指しています」「優しい気持ちでいっぱいにしてあげたい」という様な「少年に出来ることがあるという思い」が強くなり、【少年を受け入れたい思い】に加担していた。

また、「保健室を閉めていたら学校外に出て行ったかも」や「(保健室を出て行くと) 近くの商業施設に行ったり、あまりいい方向にはいかないと思います」という様な「少年に保健室は必要であるという思い」が養護教諭の【少年を受け入れたい思い】を強くさせていた。

2) 【他の生徒が利用しにくくなる状況】

養護教諭は、少年を保健室で受け入れたい気持ちを持っている一方で、「自分たちは、この子たちも大切やけど、本当に体調が悪くて入って来れない子たちも大切やし」や「内で必死にこらえている子たちが来れない保健室になってしまう」という語りが示しているように、「他の生徒が利用しにくい」ことを危惧し、少年を保健室で受け入れることを躊躇していた。

3) 【養護教諭のみの対応による限界】

養護教諭は、「何も出来ないのに聞くだけ聞いても

(中略) 保健室だけじゃどうにも出来ないから」の様に「保健室だけで出来ることの少なさ」を感じていた。これは、保健室で養護教諭が掴んだ少年の情報を他の教員と共有し、連携して対応に当たることが出来れば生まれない思いである。

しかし、「連携出来ないんだよね。聞く耳持たない、みたいな。だからうちの学校が罪作りだなんて思うこともある」のような「少年を他の教員に繋げられない状況」の中で行き詰まると、「保健室だけで出来ることの少なさ」を思い知る機会が増え、【養護教諭のみの対応による限界】を強く感じるようになっていた。

4) 【力量への自信のなさ】

「座るなり、ジュースを飲みだしたりとか、お菓子とかを出して食べようとする。それは、自分が一人で注意してもなかなか徹底が出来ないし」や「私たちの保健室って本当にそういう子たちが多いから、寝かせるとどんどん溜まっていっちゃうし」という語りが示すように、養護教諭は「少年を監督することの困難さ」を感じ、「保健室がたまり場になる」ことへの不安から、少年を保健室で受け入れることを躊躇していた。

表2 事例

上位カテゴリー	サブカテゴリー	コード	事例
少年を受け入れたい思い	少年は本当はいい子	本当はいい子	あの子をやっぱいい子やと思っとるから (分析例：プロパティ→少年をどう捉えているか、ディメンジョン→いい子)
		優しい一面もある	用務員さんとかに“してくれてありがとう”って言ったり
	少年が変化してくれることへの希望	体を大切にしたい	悪いことっていうのは自分で分かっていると思うので、自分の体を大切にしたいと思っています
		正しいストレス解消法を身につけて欲しい	ストレス解消が、腕を彫ったりすることではなく、何か信用できることを身につけて欲しいと思います
		夢を持って欲しい	やっぱり夢を持って行って欲しいって思います
	過去の成功体験	少年の変化への喜び	4年前もよく似た子たちだったんで(中略)たまに町で声掛けると“楽しい！高校行ってよかったわ”とか言ってくれたんで
	少年に出来ることがあるという思い	大人への信頼感を高めたい	裏切らない大人がいるってことを知ってもらおうことを目指しています
		優しい気持ちを与えたい	そんな優しい気持ちでいっぱいにしてあげたいんですけどね
少年に保健室は必要であるという思い	保健室を閉めると外へ出て行く	保健室を閉めていたら学校外に出て行ったかもしれないです	
	非行への発展を防ぐ	(保健室を出て行くと)近くの商業施設に行ったり、あまりいい方向にはいかないと思います	
他の生徒が利用しにくくなる状況	他の生徒が入って来れない	内では必死にこらえている子たちが来れない保健室になってしまう	
	他の生徒も大切	自分たちは、この子たちも大切やけど、本当に体調が悪くて入って来れない子たちも大切やし	
養護教諭のみの対応による限界	保健室だけで出来ることの少なさ	保健室だけではどうにも出来ない	何も出来ないのに聞くだけ聞いても(中略)保健室だけじゃどうにも出来ないから。自分の中で葛藤はいっぱいあるね
	少年を他の教員に繋げられない状況	保健室への無理解・無関心	保健室への理解というか、保健室自体が先生たちに認知されていない感じがありました
		他の教員と連携出来ない状況	連携出来ないんだよね。聞く耳持たない、みたいな。だからうちの学校が罪作りだなんて思うこともある
力量への自信のなさ	少年を監督することの困難さ	少年を指導することの難しさ	座るなり、ジュースを出して飲みだしたりとか、お菓子とかを出して食べようとする。それは、自分が1人で注意してもなかなか徹底が出来ないし
	保健室がたまり場になる	たまり場になることへの不安	私たちの保健室って本当にそういう子たちが多いから、寝かせるとどんどん溜まっていっちゃうし
	過去の責められ体験	保健室を閉鎖した経験	何かあるとすぐに“保健室閉めて”って言われたことがあります。
養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感	他の先生の協力	他の先生の助けで保健室を運営する	私1人では人数が多くて対応出来ないときは生徒指導の先生が保健室で私と同じ様に生徒の話聞いて下さったと思うんです
		仲間がいる安心感	仲間、教師集団が私を支えてくれるっていう信頼関係が出来ていたので、(保健室を)開けたら大変だろうけど、なんとかなるんじゃないかなって思えました。
	ベテランの養護教諭からのアドバイス	先輩のアドバイスによる安心感	“上にあげて相談した方がいいよ、とか、もうちょっと見たら?”って言われるだけで、“あ、そっかそうしよう”って思えるし
サポートしてくれる人をつくる努力	他の教員との関係性の構築	担任の先生とたくさん情報交換をする	最初のうちは私から先生方に話しかけるが多かったかな。お互いに情報交換し合っただけ
	他の教員への協力依頼	保健室での対応をお願いする	私1人で対応出来ないときは、他の先生にお願いして、その子と話してもらったりとか
	学校の中での保健室への理解を促す	保健室の様子を伝える	私は保健室を閉めたくないって思っているんで、そういうことを先生方に伝えるようにしていたり(中略)職員会議で保健室の様子はこんなですって言う機会を持たせてもらっているんで
	他の養護教諭と関わる機会を増やす	前任の養護教諭と連絡をとる	去年は小学校に向かいに行って(中略)小学校の先生とはすごい密に連絡をとった
生徒への理解を深める	多くの生徒と関わる	多くの生徒に話しかける	毎日たくさんの子とも話すとこのをまず1つは心がけていて。おはようだけでもいいので
		普段から話しやすい関係	健康観察とかしているんで、どの子でも声を掛けられるし。(中略)日頃から繋がりはつくっているつもりなので
	少年を知る努力	少年がいるところへ出かける	保健室にずっと閉じこもっていると、なかなかその子たちが見えてこなかったりするので、少年たちが集まっているところに出かけて行く
		少年の話聞く	昨日はこんなことしてたけどどうなん?とか聞いたりするようにしています

また、これらの養護教諭の考え方は「何かあるとすぐに“保健室閉めて”って言われたことがあります。」といった[過去の責められ体験]が影響しており、[過去の責められ体験]が多いほど【力量への自信のなさ】が強くなっていた。

5) 【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】

【少年を受け入れたい思い】と【他の生徒が利用しにくくなる状況】【養護教諭のみの対応による限界】【力量への自信のなさ】の間での葛藤に【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】が加わると養護教諭は少年を保健室に受け入れていた。

【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】は「私1人では人数が多くて対応出来ないときは生徒指導の先生が保健室で私と同じ様に生徒の話を聞いて下さったと思うんです」という言葉が示しているように、1人で対応しきれないときに[他の先生の協力]が得られるという思いと、「(養護教諭の先輩)“上にあげて相談した方がいいよ、とか、もうちょっと見たら?”って言われるだけで、“あ、そっかそうしよう”って思えるし」というように困ったときは[ベテランの養護教諭からのアドバイス]が得られるという思いから成り立っていた。養護教諭が【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得ることは、「仲間、教師集団が私を支えてくれるっていう信頼関係が出来ていたので、(保健室を)開けたら大変だろうけど、なんとかなるんじゃないかなって思えました」という様に、養護教諭が少年を保健室で受け入れる判断を下すことに加担していた。

一方で、【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得られなかった養護教諭は「連携出来ないっていうのはすごく大きいと思う。ここでいろいろ聞いても、私たちも誰にそれを言ってもいいかも分からないし」という様に【養護教諭のみの対応による限界】を強く感じ、少年を保健室で受け入れることが出来ずにいた。

6) 【サポートしてくれる人をつくる努力】

上記の【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を初めから得ている養護教諭は少なく、【サポートしてくれる人をつくる努力】をすることによって、徐々にサポートを得ることが出来るようになっていた。この2つのカテゴリーは互いに影響しあいながら循環してより強いサポート体制を築くことを可能にしていた。

「最初のうちは私から先生方に話しかけることが多かったかな。お互いに情報交換し合っただけ」という様に『担任の先生とたくさん情報交換をする』ことで[他の教員との関係性の構築]を目指す努力や「私は保健室を閉めたくないって思っているの、そういうことを先生方に伝えるようにしていたり(中略)職員会議で保健室の様子はこんなですって言う機会を持たせてもらっているの」という様に[学校の中での保健室への理解を促す]努力をし、[他の教員への協力依頼]がしやすい環境を養護教諭が自ら作り上げていた。

また、「去年は小学校に出向いて行って(中略)小学校の先生とはすごい密に連絡をとった」という様に、[他の養護教諭と関わる機会を増やす]努力をすることが[ベテランの養護教諭からのアドバイス]を受けられる機会を増やすことや、学校外にもサポートしてくれる人をつくることにつながっており【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を高めていた。

しかし、「保健室への理解というか、保健室自体が先生たちに認知されていない感じがありました」という語りから示しているように『保健室への無理解・無関心』傾向が強い学校もあり、【サポートしてくれる人をつくる努力】の困難さも明らかになった。

7) 【生徒への理解を深める】

養護教諭は、他の生徒が保健室を利用しにくい状況を改善するために、「毎日たくさんの子と話すというのをまず1つは心がけていて。おはようだけでもいいので」という様に[多くの生徒と関わる]ことで生徒全員と『普段から話しやすい関係』を作り、保健室に入って来れない生徒が出にくくなるように努力をしていた。

また、「昨日はこんなことしてたけどどうなん?とか聞いたりするようにしています」という様に養護教諭が[少年を知る努力]をし、少年の本当の思いを理解することで[少年は本当はいい子]という思いを深め、【少年を受け入れたい思い】を強化させていた。

VI. 考察

1. 養護教諭の保健室での少年の受け入れ判断に影響する因子について

本研究結果から、養護教諭は常に【少年を受け入れたい思い】を持っており、少年を受け入れたいという立ち位置から、様々な葛藤はあるものの、少年に対して支援が出来たという体験とサポートが得られたという感覚によって受け入れを決断していることが分かっ

た。平成9年に出された保健体育審議会答申⁸⁾では養護教諭の新たな役割としてヘルスカウンセリングを掲げており(養護教諭の行うヘルスカウンセリングは、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かし、児童生徒の様々な訴えに対して、常に心的な要因や背景を念頭に置いて、心身の観察、問題の背景の分析、解決のための支援、関係者との連携等、心や体の両面への対応を行う健康相談活動である)と述べている。不良行為少年が問題行動をとる背景に人から受け入れてもらえない疎外感など心的な要因がある⁹⁾ことを鑑みると、少年たちを受け入れ、ヘルスカウンセリングを行うことは養護教諭の重要な職務の1つであり、少年の受け入れを拒むことは、養護教諭にとっても職務を遂行出来なかった苦しみに繋がるものと考えられる。

しかし、少年たちは集団になると破壊的・暴力的行為を行うようになり、養護教諭一人の力ではとても制しきれなくなる¹⁰⁾場合もあるため、少年たちを保健室から追い出すという選択肢を取らざるを得ない状況に陥っている養護教諭も少なくない。カテゴリ【他の生徒が利用しにくくなる状況】や【養護教諭のみの対応による限界】【力量への自信のなさ】は、養護教諭の少年らを一人で制しきれなくなることへの不安の表れであり、[少年を他の教員に繋げられない状況]や[過去の責められ体験]が養護教諭の不安をより強くしていると考えられる。

ここで重要となってくるのは、少年たちが集団になると養護教諭“一人”の力では制しきれなくなるということである。カテゴリ【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】は、[他の先生の協力]があった場合養護教諭は少年たちを保健室で受け入れることが出来ることを示唆しており、養護教諭が“一人でない”ことの重要性を明示していると考えられる。

不良行為少年が保健室を利用することをよく思っておらず、協力を得ることが難しい教員も少なくないが、岡村ら¹¹⁾が(非行傾向のある子どもたちは、家庭から、学校から、居場所を求めて離脱していく。(中略)しかし、家庭や学校の外にある世界が、本当に安心できる、健康な場であることはきわめてまれである)と述べているように、少年らにとって保健室は学校に留まることが出来る最後のチャンスであり、少年を保健室で受け入れることは、少年の今後の健康に大きく貢献するものと考えられる。本研究結果でも、サブカテゴリ【少年に保健室は必要であるという思い】の中で

「(保健室を出て行くと)近くの商業施設に行ったり、あまりいい方向にはいかないと思います」という語りが見られ、少年にとって保健室が学校に留まることが出来る最後の砦であることが示されている。そのため、養護教諭には不良行為少年が保健室を訪れる意義を周囲に示し、【サポートしてくれる人をつくる努力】をすることが求められていると考える。

以上より、“少年にとって保健室は学校との繋がりを得ることが出来る最後の砦であるため、保健室での受け入れの判断は少年の今後の心身の健全な成長に大きな影響を及ぼすこと”“養護教諭が保健室で少年を受け入れるためには【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】が必要であること”が明らかになったと考える。

2. 受け入れの判断に影響する養護教諭を取り巻く環境について

本研究結果から、養護教諭は常に【少年を受け入れたい思い】を持っているものの【養護教諭のみの対応による限界】や【他の生徒が利用しにくくなる状況】、養護教諭自身の【力量への自信のなさ】を感じた結果、少年を保健室で受け入れること躊躇しており、受け入れへの決断に最も大きな影響を及ぼす因子は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】であることが分かった。【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】は、[他の先生の協力]と[ベテランの養護教諭からのアドバイス]から成り立っており、特に日常から生徒への支援を共有する[他の先生の協力]は養護教諭の【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を強化すると考えられる。

しかし、久保¹²⁾は(今でも養護教諭の“甘やかし”説と保健室を“たまり場”として非難する管理職や教員はいる。経験の浅い養護教諭にとって、一度はぶつかる現実の壁であろう。その壁をどう破るかが、養護教諭としての力量をつけていくことになるのかもしれない)と述べており、向後ら¹³⁾も(このような(非行の)生徒が保健室を利用することに対して、校内の職員にはなかなか理解されなかった)と述べているように、教員の中には不良行為少年が保健室を訪れることに対して否定的な思いを抱いている教員も少なくない。

さらに、小笹ら¹⁴⁾が(多くの学校で養護教諭は定員が一人である。養護教諭として職場に先輩や後輩がいるわけではなく、職務内容について相談する機会がない。他の教諭に相談しても指導を受けるには限界が

ある。また、養護教諭は一人であるために心理的にも組織内で孤立する危険性が高い」と述べているように、[ベテランの養護教諭からのアドバイス]を受ける機会も少なく、【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得られずに【養護教諭のみの対応による限界】や[少年を監督することの困難さ]を強く感じ、少年を受け入れられずにいる養護教諭も多数存在しているものと考えられる。

以上より、教員の中には不良行為少年が保健室を訪れることに対して否定的な思いを抱いている教員も少なくないことや[ベテランの養護教諭からのアドバイス]を受ける機会が乏しいことから、“養護教諭を取り巻く環境は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】が得やすい環境とは言えず、養護教諭が【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得やすい環境を作ることが今後の課題である”と考えられる。

3. 養護教諭が少年を受け入れるために行っている具体的な方策について

本研究では、養護教諭は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得るために[他の教員との関係性の構築]や[他の教員への協力依頼][学校の中での保健室への理解を促す][他の養護教諭と関わる機会を増やす]といった【サポートしてくれる人をつくる努力】をしていることが明らかになった。

その中でも特に[他の教員との関係性の構築]は最も多くの養護教諭の語りの中から抽出され、【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得るために不可欠な要素であることが示された。向後ら¹⁵⁾も校内での連携について〈連携を図っていく際に人間関係を基盤とする相互の信頼関係は不可欠であることはいうまでもないが、この信頼関係づくりを養護教諭の相談活動の機能の一つとしてとらえていくことも、連携のつまずきを防ぎ、校内での協体制をつくりあげていく上で必要である〉と述べており、ここで述べられている“信頼関係”を築くための努力は[他の教員との関係性の構築]と同じ意味を示しているものと考えられる。また、向後らが信頼関係づくりを養護教諭の相談活動の機能の一つとしてとらえているように、【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得るために最も努力すべき主体は養護教諭であり、【サポートしてくれる人をつくる努力】をすることも養護教諭の重要な職務の一つであると考えられ

る。

本研究で得られた【サポートしてくれる人をつくる努力】の具体策は「最初のうちは私から先生方に話しかけることが多かったかな。お互いに情報交換し合っ
てね」という様に『担任の先生とたくさん情報交換をする』ことや「職員会議で保健室の様子はこんなです
よって言う機会を持たせてもらっているの」という
様に『保健室の様子を伝える』ことであったが、この
情報の伝達は「教室や授業では見られない生徒の様子
を知りたい」¹⁶⁾といった他の教員の養護教諭への要望
にも呼応することになり、相互の信頼感を高める取り
組みであると考えられる。

また、養護教諭は「去年は小学校に出向いて行って
(中略) 小学校の先生とはすごい密に連絡をとった」
という様に、少年と関わったことのある近隣の学校の
養護教諭を中心とした[他の養護教諭と関わる機会を
増やす]ことで、少年への理解を深めたり、学校間の
連携を密にしていた。これは、学校外でも【サポート
してくれる人を作る努力】であると考えられる。

また、[ベテランの養護教諭からのアドバイス]が
養護教諭の【力量への自信のなさ】を緩和しているこ
とは、これまでの研究でも明らかになっておらず、本
研究で得られた新しい知見であると考えられる。しか
し、積極的に他の養護教諭のところに出向いてアドバ
イスを求められる養護教諭ばかりではないことが予測
されるため、今後は養護教諭同士が関係性を深められ
るような取り組みを実施することが求められていると
考える。

以上より、養護教諭の[他の教員との関係性の構築]
[他の教員への協力依頼][学校の中での保健室への理
解を促す][他の養護教諭と関わる機会を増やす]と
いった取り組みは、保健室をサポートしてくれる人を
増やすことに繋がり、少年の受け入れを可能にする重
要な役割であると考えられる。

VII. 結論

- ・養護教諭が少年の受け入れを判断する際に影響する因子は、【少年を受け入れたい思い】【他の生徒が利用しにくくなる状況】【養護教諭のみの対応による限界】【力量への自信のなさ】【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】【サポートしてくれる人をつくる努力】【生徒への理解を深める】という7つの上位カテゴリーで構成されている。
- ・養護教諭の受け入れの判断に最も大きな影響を及ぼ

す因子は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】である。

- ・養護教諭は【養護教諭をサポートしてくれる存在がある安心感】を得るために【サポートしてくれる人をつくる努力】をする必要がある。

Ⅷ. 本研究の限界と今後の展望

本研究では、倫理的な観点から、保健室での参加観察を行えなかったため、保健室での実際の様子が観察できていないという限界がある。また、インタビューの対象を養護教諭のみに絞っているため、学級担任や他の教員にもインタビューを行うことで、連携に関する考察を深める必要があると考える。

また、本研究はGrounded Theory Approachを用いて分析を行ったが、時間的制約により、理論的飽和に達したことの確認が出来なかったため、今後さらに対象者を追加したり、本研究の対象者に確認作業を行ったりすることで、これ以上のカテゴリーが出現しないことを確かめる必要があると考える。

謝辞

本研究への参加を快く承諾して下さい、研究者にこれまでの経験や少年への思いを語って下さった15名の養護教諭の先生方に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 内閣府：平成21年度版 青少年白書 青少年の現状と施策, 53, 2009.
- 2) 加藤弘通：問題行動と学校の荒れ, ナカニシヤ出版, 京都, 8, 2007.
- 3) 2) 前掲, P.11, 2007.
- 4) 内閣府：平成23年版 子ども・若者白書, 179, 2011.
- 5) 松本俊彦：非行や死の危険が高まる思春期－衝動行為の増加, 児童心理, 65(15), 99-105, 2011.
- 6) 子どもの危機と養護教諭の仕事を考える会：危機の思春期 再生の思春期－寄りそう保健室の記録, 草土文化, 東京, 154, 2009.
- 7) 國分康孝：保健室からの育てるカウンセリング, 図書文化社, 東京, 49, 2009.
- 8) 文部科学省(1997.9)：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について 〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314691.htm〉
- 9) 養護教諭の相談を学ぶ会：子どもの心に寄り添う養護教諭の相談的対応, 学事出版, 東京, 203, 1999.
- 10) 9) 前掲, P.207, 1999.
- 11) 岡村達也, 加藤美智子, 八巻甲一：思春期の臨床心理 学校現場に学ぶ「居場所」づくり, 日本評論社, 東京, 165, 2001.
- 12) 久保千恵子：養護教諭への役割期待に関する研究－テレビドラマにおける養護教諭の表象に着目して－, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57(2), 41, 2009.
- 13) 向後正, 西君子：養護教諭のいま・ここでの活動 学校教育相談連携の手引き, 教育出版株式会社, 東京, 166, 1996.
- 14) 小笹典子, 白井永男, 高崎裕治：養護教諭の職務実態と自己評価－職業的自律性を求めて－, 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門, 66, 7, 2011.
- 15) 13) 前掲, P.52, 1996.
- 16) 関口瑞恵：校内支援を支えるための養護教諭支援チームづくり－市内養護教諭部会でのケース会議を通して－, 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告, 9, 85, 2011.

Original Article

Abstract

Factors Influencing *yogo* Teachers' Acceptance of Middle-School Juvenile Delinquent Students

Introduction : This qualitative study aimed to examine the factors that influence *yogo* teachers' acceptance of juvenile delinquent students, to contribute to development of more comprehensive approaches.

Design and method : Using grounded theory approach analysis, we conducted in-depth interviews with 15 middle-school *yogo* teachers.

Results : Seven categories of factors were extracted : "A desire to accept juvenile delinquent students," "Consideration of other students," "Limits of being only a *yogo* teacher," "Lack of confidence in my ability," "Sense of security in there being other individuals supporting the *yogo* teacher's office," "An effort to make comrades," and "Deepened understanding of juvenile delinquent students."

Discussion : "Sense of security in there being other individuals supporting the *yogo* teacher's office" is the most important factor, and the results suggested that to achieve this sense of security, *yogo* teachers need to clearly engage in "An effort to make comrades."

Key words : *yogo* teacher, juvenile delinquent students, acceptance, Grounded Theory Approach